

誇り高き御台所 ～天璋院篤姫～

みなさま今回は待望の「女性」の主人公です！その名も篤姫（あつひめ）！「姫」と言うだけあってもちろんエライ人なのですが、身分よりも自分の人生をかけて人々の命を救ったという意味で本当にエライ人だと思います。

ちなみにみなさんは「大河ドラマ」を観ていますか？大河ドラマとは1963年から始まったNHKで毎週日曜の夜8時から1年間かけて放映されている番組です。今年は明智光秀を主人公にした「麒麟が来る」が放送されています。その長い大河の歴史の中で私が最も面白かったのは2008年の「篤姫」です！感動しすぎて、勢いで舞台となった鹿児島まで車で行ってしまいました！これが、篤姫が見た桜島か～！とかいろいろ感動しながら観光してきました。また、主人公の篤姫役を演じた宮崎あおいさんがとても素敵で魅入ってしまいました。大河デビューをするならまず篤姫からどうぞ！

篤姫は、天保6年（1836）12月19日薩摩国（現在の鹿児島県）で誕生します。父は薩摩藩主、島津家一門の今和泉家の島津忠剛です。簡単に言えば当時の薩摩藩の殿様である島津斉彬（しまづなりあきら）のいとこの娘です！だから殿様の一族のお姫様だったのです。ちなみにこの島津斉彬は土佐の山内容堂と並び、幕末四賢候（幕末の最も賢い四人の大名）と言われ、とても信頼が厚く優秀な殿様でした。篤姫は幼名は一（かつ）、そして市（いち）となり、その後篤姫となります。それが後に江戸幕府の二番目の身分である御台所（将軍の正妻）になるのです。えっ？大名の分家の姫程度が幕府の将軍の正妻に！？と思った君は歴史感覚が非常にするどい！そう！格が違うのです！では、なぜ篤姫は御台所になれたのでしょうか！

当時の将軍は13代徳川家定でした。しかし、家定は病弱でいつ死ぬか分からないのに、子供がまだ生まれていない。正妻は2人いたのに2人とも亡くなった。このままでは次の将軍で揉めてしまう！できるだけ早く新しい元気な妻をもらわなければとなりました。しかし、将軍との格を考えた場合、妻となれるのは京都の五摂家（貴族のトップ5）の娘と決まっていますが、その五摂家にも年頃の娘は先の亡くなった2人で、もういません。そこで、過去に島津の娘と結婚した例があったので、島津斉彬の娘と結婚させようとなります。しかし、島津斉彬にも娘がいません。さあどうしようとなった時に、島津斉彬のいとこに、とても賢く体の丈夫な10代の娘がいるとなったのです。それが後の篤姫です。ちなみに大河ドラマでは後に薩摩藩を背負って立ち、薩長同盟にも尽力した伝説の家老「小松帯刀」（こまつたてわき）役の瑛太さんが恋心を寄せていた篤姫にプロポーズする直前でこの話が舞い込んできました。あの帯刀の失恋するシーンは本当に悲しかったです。（フィクションですけど）

そこで篤姫は将軍との格を合わせるために、まず、島津斉彬の養子になります。そこで、「幾島」（いくしま）という、しつけ系の女性に将軍の妻として恥づかしくないように厳しい教育を受けます。しかし明るく元気で自由奔放な篤姫に幾島は大変苦労したようです。そして、さらに格上の五摂家の近衛家の養子になり、13代将軍徳川家定の正妻となります。篤姫20歳のときでした。そこで家定との結婚生活が始まるのですが、わずか1年9ヶ月のはかない夢でした。そう、家定が亡くなったのです。篤姫は未亡人となり落飾し（髪を短く切り仏門に入り）「天璋院」と名乗ります。しかし、ここからがさらに大変な人生となります。ただでさえ側用人もあわせて1000人以上の女性を抱え、謀略の渦巻く恐ろしい大奥を取り仕切らなければならないところに、後ろ盾となる夫の死は篤姫にとっては目の前が真っ白になるほどの衝撃だったと思われます。さらにもう一つの後ろ盾である薩摩藩主、島津斉彬も亡くなります。またまたさらに260年続いた太平の世を終わらすペリー来航以降、討幕運動（江戸幕府を倒そうという運動）を行う武士達の活動が活発化してきました。そんな時代のうねりの中で篤姫にはさらなる試練



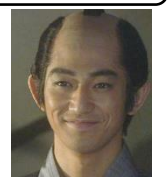
篤姫



島津斉彬



小松帯刀



徳川家定



が待ち受けていました。家定との間に子どもが生まれなかったため、14代将軍を選ぶのに揉めに揉めます。慶喜（よしのぶ）を推す「一橋派」v s 後の家茂（いえもち）を推す「南紀派」が対立します。しかも篤姫はその中心で板挟みにあいます。生家の島津は「一橋派」。篤姫の取り仕切の大奥は「南紀派」です。篤姫はそんな中、自分は幕府の人間として生きると覚悟を決めます。やっとのことで南紀派が勝利し、14代将軍は徳川家茂になるのですが、先ほど述べた通り、世の中は「尊皇運動」、つまり「江戸幕府の将軍を倒し、京都にある朝廷の天皇を中心とした国作り」をしようとする勢力が力をつけてきました。そこで、幕府は朝廷に取り入り、幕府を守ろうと考えました。いわゆる「公武合体」です。具体的には将軍と天皇の妹が結婚し、家族になろうとしたのです。そうすれば、天皇の家族である将軍を攻撃できないだろうと考えたのです。しかし、これがまた、篤姫を苦しめます。当時の孝明天皇の妹「和宮」（かずのみや）は有栖川熾仁親王という同じ皇族の許嫁（いいなづけ＝婚約者のこと）がいたのです。それなのにはるかに格下の将軍なんかと結婚しなければならないというのが嫌でたまりません。そんな中で14代将軍徳川家茂のもとに和宮は降嫁（自分より身分の低い人と結婚）します。すると困るのが篤姫です。篤姫は和宮の義理の母になるのですが、和宮の方が身分ははるか上。この嫁姑（よめしゅうとめ）が非常にややこしい。例えば和宮が最初に篤姫に会ったとき土産物に「お母様へ」と書かずに「天璋院へ」と呼び捨てだったり、篤姫も和宮の上座に座り、和宮には座布団も出さなかったとか・・・考えるだけで恐ろしい嫁姑問題が起こります。当時江戸の武家の風習と京都の公家の風習はとんでもなく違う物でした。座り方・座る位置から髪型や着物の着方、言葉遣い、呼び方、食器、食べ方などあらゆるところで違うのです。和宮は嫁に入っただにもかかわらず、京都の風習を続けます。しかし、篤姫は江戸の風習をさせようとします。常に一触即発で周りにいる人達は毎日がヒヤヒヤものですね（笑）。ちなみに風習の違いで言うと今でもひな人形は京都と東京では左右が逆ですね！しかし、身分は違えど、家茂と和宮は同い年で夫婦仲はとてもよかったそうです。何も分らず不安の中、江戸へ下った和宮にとって家茂の優しさが心の支えだったようです。しかしまた不幸が訪れます。わずか4年で家茂はかえらぬ人となりました。第二次長州征伐に行くため、京都に行き、和宮のために西陣織の土産を買い、大阪城に入った際に家茂は急死します。和宮のもとへはその西陣織の着物だけが届けられました。その着物を抱いて和宮は泣き崩れたそうです。和宮は未亡人となったにもかかわらず、京都には帰らず、幕府の妻として生涯生きることを誓います。そして徳川慶喜が15代将軍となります。しかし、さらに試練が訪れます。篤姫の生まれ故郷の薩摩が西郷隆盛や小松帯刀を中心として長州との間に薩長同盟を結び、幕府を倒すために戦争を起こしました。これがいわゆる戊辰戦争です。幕府軍は鳥羽伏見の戦いで敗れ、江戸に戻ります。そして薩長軍は江戸を包囲します。西郷は江戸城を燃やして新しい時代の到来を民衆に知らせようと考えていました。しかし、江戸は100万人の人が暮らす世界屈指の大都市です。そこが戦場になれば、どれほどの被害が出るか考えるだけで恐ろしいです。そこで活躍したのが篤姫と和宮です。薩長軍のトップである東征大総督は有栖川熾仁親王で和宮が結婚するはずだった人です。また、攻撃を決めるトップの東征大総督府下参謀は薩摩の西郷隆盛。薩摩時代に篤姫に仕えていた男です。しかも西郷が最も尊敬する島津斉彬の姫です。和宮は有栖川熾仁へ、篤姫は西郷隆盛へ「江戸の攻撃中止」を願う手紙を送ります。西郷はこの手紙を読んで涙を流したそうです。そして勝海舟との会談で江戸城無血開城が実現します。その後も、篤姫は薩摩の姫ではなく幕府の妻として人生全うします。明治となり江戸城を出た後も、大奥にいたたくさんの女性達を路頭に迷わせてはいけないと、就職先や嫁ぎ先を斡旋し、全財産をつぎ込みます。どれだけお金に困っても薩摩からのお金は一切受け取らなかったそうです。亡くなったときは今のお金に換算して約6万円しか持っていなかったそうです。いかに苦しい生活をしていたか、しかし、幕府の妻として大奥のトップとして誇りを持ち続けたかが窺えます。ちなみ余談ですが、篤姫は明治になってから勝海舟と和宮とごはんを食べたり、芝居を観にいったそうです。あれだけ仲の悪かった篤姫と和宮は江戸を守るという志の下、本当に仲のいい親子になれたんだと心温まるエピソードですね。上に立つ者はなぜ権力があるのか。それは下の者を守るためだと篤姫は教えてくれたように思います。みなさんも今後先輩や上司になったとき、後輩や部下を守る人になって下さい。



徳川家茂



和宮

